

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2020 伊達聖伸

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」

# 宗教的／世俗的ディストピアと ユマニスム

「われわれはことばを破壊しているんだ[.....]ニュースピークをぎりぎりまで切り詰めようとしている。第11版には、2050年までに死語となるような単語は一つとして収録されないだろう」(G・オーウェル『1984』)。

「1914年、1939年と同じように、2014年、2022年、2050年にも同じことが起こった。そして2084年が最後となった」(B・サンサル『2084』)。

伊達聖伸(地域文化研究専攻)

フランス語部会／地域文化研究分科・フランス研究コース

# 宗教と世俗

◎宗教の時代から世俗の時代へ

◎宗教復興？

・ハンチントン「文明の衝突」？

◎世俗の行き詰まり？

・「人新世」が環境を破壊する？

ホルクハイマー＆アドルノ『啓蒙の弁証法』(1947)

「啓蒙の自己崩壊」「啓蒙が神話へ逆行していく」

「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」

# ディストピア／ユマニズム

## ◎ユートピアとディストピア

- utopia ユー(よい)＋トピア(場所)
- dystopia ディス(悪い)＋トピア(場所)

## ◎ディストピア小説・映画

## ◎ユマニズム

→『2084』(宗教的ディストピア)を、『1984』(世俗的ディストピア)を下敷きにして読みながら、考える。

# George Orwell (1903—1950) *1984*

著作権等の都合により  
省略しました

George Orwell  
1984の書影  
(ポルトガル語版)

Companhia Das Letras,  
2009

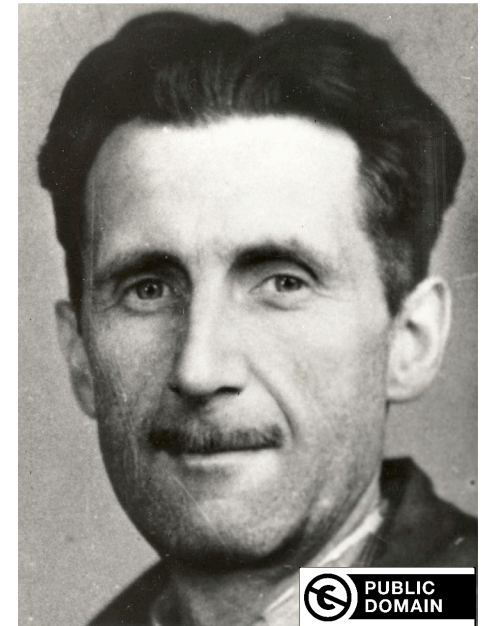
著作権等の都合により  
省略しました

1984: NINETEEN  
EIGHTY FOURの画像  
(英語 Kindle版)

著作権等の都合により  
省略しました

George Orwell  
1984の書影  
(スペイン語版)

CDEBOLSILLO, 2013



# Boualem Sansal (1949～), 2084

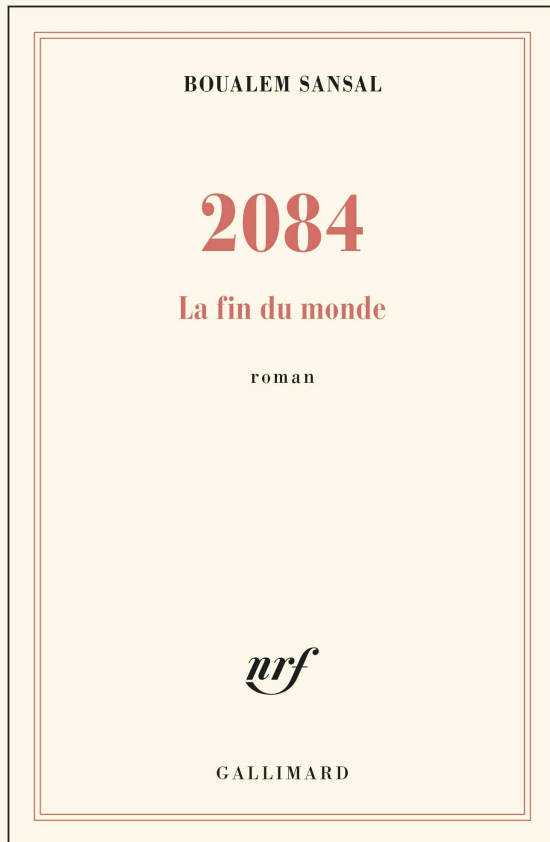
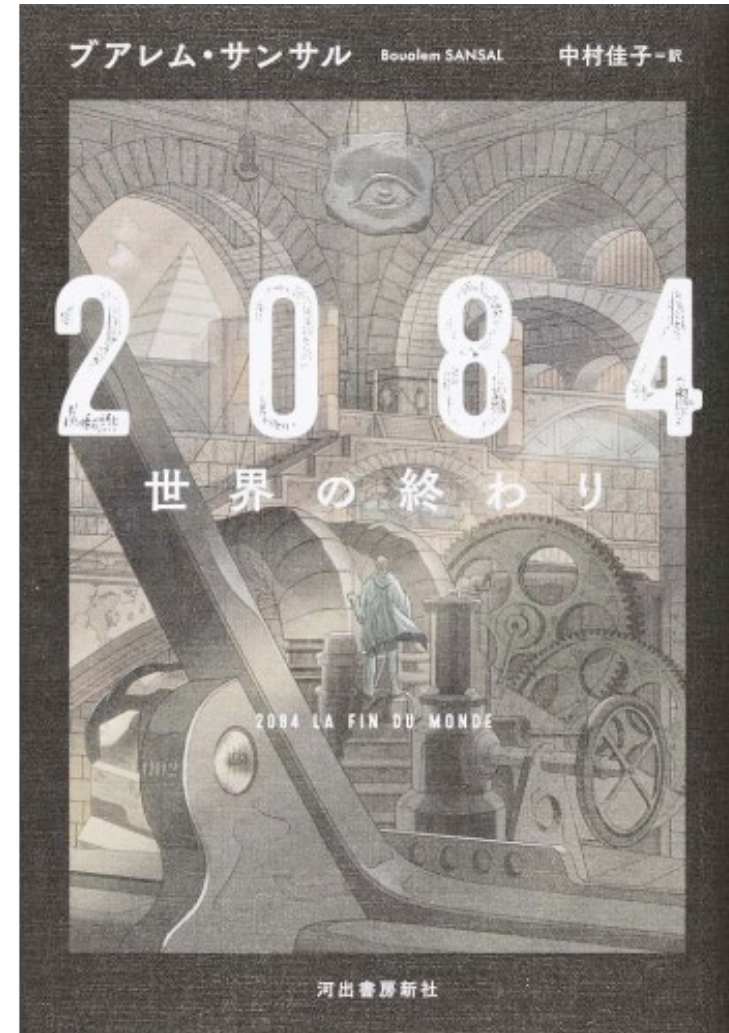


Photo by Heike Huslage-Koch  
from Wikimedia Commons

[CCO](#)



Boualem Sansal, 2084 La fin du monde  
© Editions Gallimard, Paris 2015

ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)  
『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年

# 前置き(1)フランスのムスリムの人口

- フランスの人口は6000万人超  
ムスリム人口は？
  - ①50～60万人
  - ②150～300万人
  - ③500～700万人
  - ④1500～2000万人
- フランスのムスリムを数えることの難しさ
  - ①共和国 ②政治的争点 ③ムスリムとは



# フランスの宗教状況2010～2050

(Pew-Templeton Global Religious Futures Project)

France 



## Related Pew Research Reports

The Future of World Religions: Population Growth Projections, 2010-2050

Muslim Networks and Movements in Western Europe

Compare France \*



Overview

Demographics

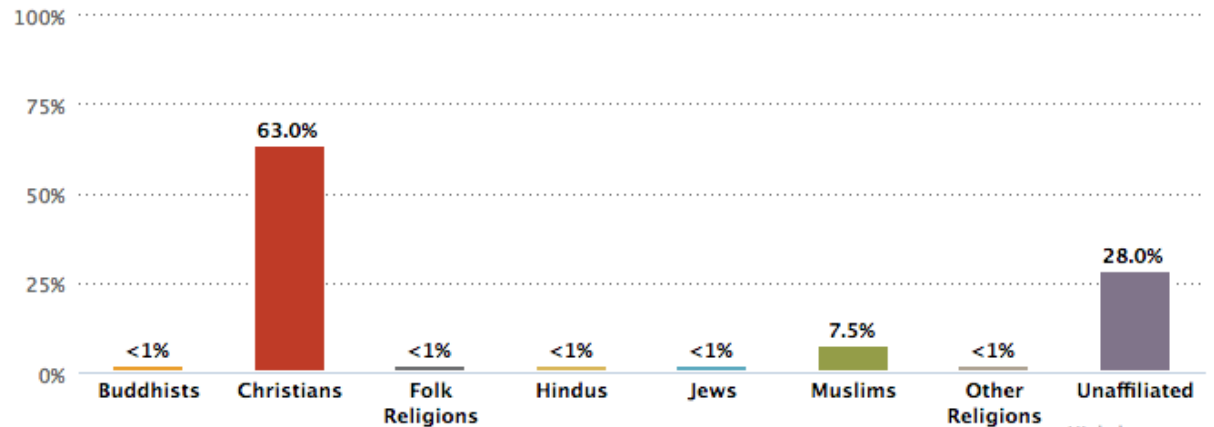
Religious Restrictions

Religion News

## Religious Demography: Affiliation

2010

All Religious Groups



Source: The Future of World Religions: Population Growth Projections, 2010-2050

Highcharts.com

Pew Research Center  
Pew-Templeton Global Religious Futures Project  
[http://www.globalreligiousfutures.org/countries/france/religious\\_demography#/?affiliations\\_religion\\_id=0&affiliations\\_year=2010](http://www.globalreligiousfutures.org/countries/france/religious_demography#/?affiliations_religion_id=0&affiliations_year=2010)

6000万人の7.5%＝約450万人



## Religious Demography: Affiliation

Pew Research Center

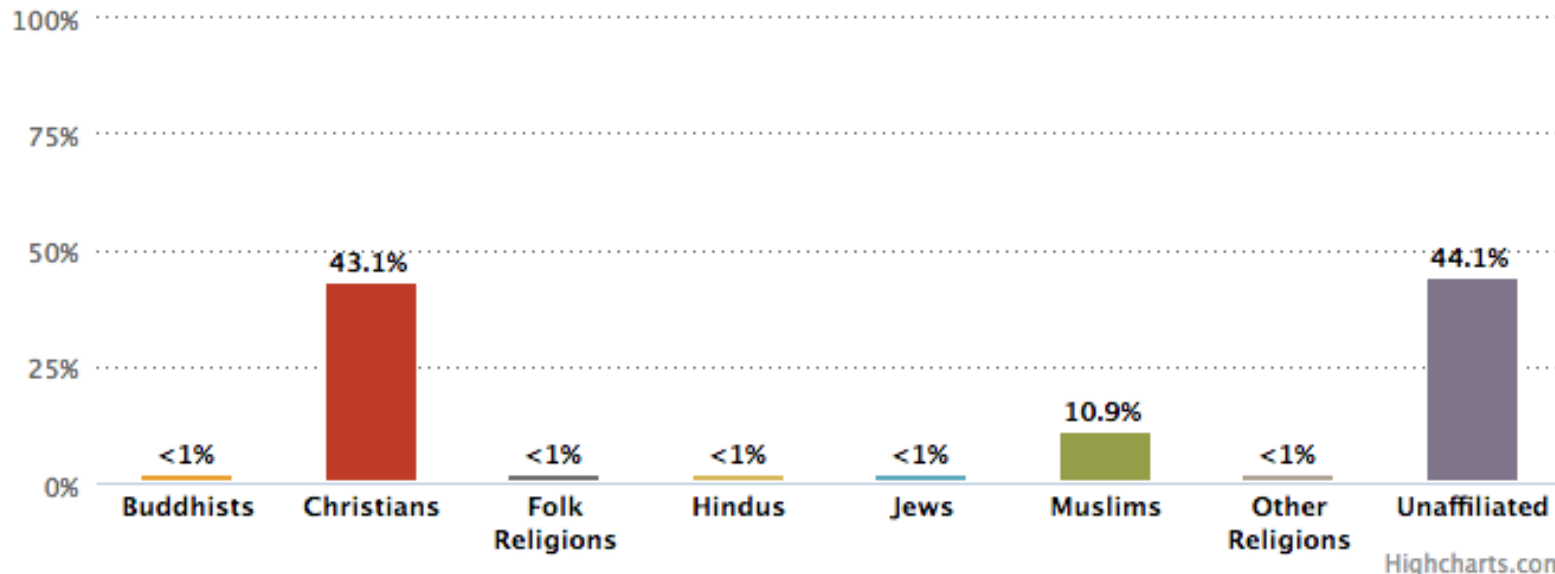
Pew-Templeton Global Religious Futures Project

[http://www.globalreligiousfutures.org/countries/france/religious\\_demography/#/?affiliations\\_religion\\_id=0&affiliations\\_year=2050](http://www.globalreligiousfutures.org/countries/france/religious_demography/#/?affiliations_religion_id=0&affiliations_year=2050)

2050

All Religious Groups

6000万人の10.9%＝約650万人



Source: The Future of World Religions: Population Growth Projections, 2010-2050

将来予測 (2010/2020/2030/2040/2050)

|              | キリスト教徒                   | ムスリム                     | 無宗教                      |
|--------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| イギリス         | 64.3/59.1/54.3/49.6/45.4 | 4.8/6.1/7.7/9.4/11.3     | 27.8/31.2/34.2/36.9/38.9 |
| フランス         | 63.0/58.1/53.1/47.9/43.1 | 7.5/8.3/9.1/9.9/10.9     | 28.0/31.9/36.1/40.5/44.1 |
| ドイツ          | 68.7/66.0/63.7/61.5/59.3 | 5.8/6.9/7.9/8.9/10.0     | 24.7/26.3/27.6/28.7/29.8 |
| スペイン         | 78.6/75.2/71.4/68.1/65.2 | 2.1/3.3/4.6/5.9/7.5      | 19.0/21.0/23.5/25.2/26.5 |
| イタリア         | 83.3/80.8/78.3/75.6/72.8 | 3.7/4.9/6.1/7.7/9.5      | 12.4/13.4/14.5/15.5/16.3 |
| ポルトガル        | 91.9/90.5/89.1/87.7/86.3 | 1未満/1未満/1未満/1未満/1.3      | 7.5/8.6/9.5/10.5/11.3    |
| ポーランド        | 94.3/92.5/90.8/88.8/86.8 | 1未満/1未満/1未満/1未満/1未満      | 5.6/7.3/9.0/10.9/12.8    |
| ボスニア・ヘルツェゴビナ | 52.3/51.1/50.0/49.2/48.5 | 45.2/46.5/47.7/48.6/49.4 | 2.5/2.4/2.3/2.2/2.1      |
| ロシア          | 73.3/72.9/72.4/71.9/71.3 | 10.0/11.4/13.1/15.0/16.8 | 16.2/15.2/13.9/12.6/11.3 |

著作権等の都合により省略しました

Résistance républicaine Web版の記事

Oui il y a bien 20 millions de musulmans chez nous et  
l'affrontement est inévitable

Pierre 978、2016年8月13日

<https://resistancerepublicaine.com/2016/08/13/oui-il-y-a-bien-20-millions-de-musulmans-chez-nous-et-laffrontement-est-inevitable/>

著作権等の都合により省略しました

Résistance républicaine Web版の記事

Ils enseignent aux profs à ne pas chercher si une info est vraie  
mais si elle vient d'un site « légitime »

Maxime, 2018年1月25日

<https://resistancerepublicaine.com/2018/01/25/ils-enseignent-aux-profs-a-ne-pas-chercher-si-une-info-est-vraie-mais-si-elle-vient-dun-site-legitime/>

# 数字からいかなる意味を読み込むのか？

## 「2050年、イスラム教徒人口が3倍に」

「日一日と欧州大陸は変わっていき、のみならずその変化に対する「軟着陸」の可能性も失われていく」

◎著者の立場は？

◎数字の評価は公正か？

Pew-Templeton Global Religious Futures Project

スウェーデンのムスリム: 4.6 (2010) → 12.4 (2050)

キリスト教徒: 67.2 (2010) → 52.3 (2050)

無神論: 27.0 (2010) → 32.8 (2050)



ダグラス・マレー(著)、中野 剛志(解説)、町田 敦夫(訳)  
『西洋の自死』東洋経済新報社、2018年

# 前置き(2) アルジェリアの文脈

◎フランスの植民地(1830～1962)

◎独立戦争(1954～62)の傷跡

- FLN／ハルキ／ピエ・ノワール
- アラブ社会主義＋イスラーム

◎FLN長期政権と腐敗→「暴動」1988→FISの圧勝  
1991→軍のクーデタ1992→FISの非合法化とGIA

◎泥沼化するアルジェリア内戦(1990年代)

| 年    | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 2000 | 2001 | 2002 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 犠牲者数 | 6388 | 8086 | 5152 | 5878 | 3058 | 1273 | 1573 | 1130 | 910  |

アルジェリアのテロ犠牲者数(私市正年編『アルジェリアを知るための62章』明石書店、2009:163 より)

# Boualem Sansal (1949～)

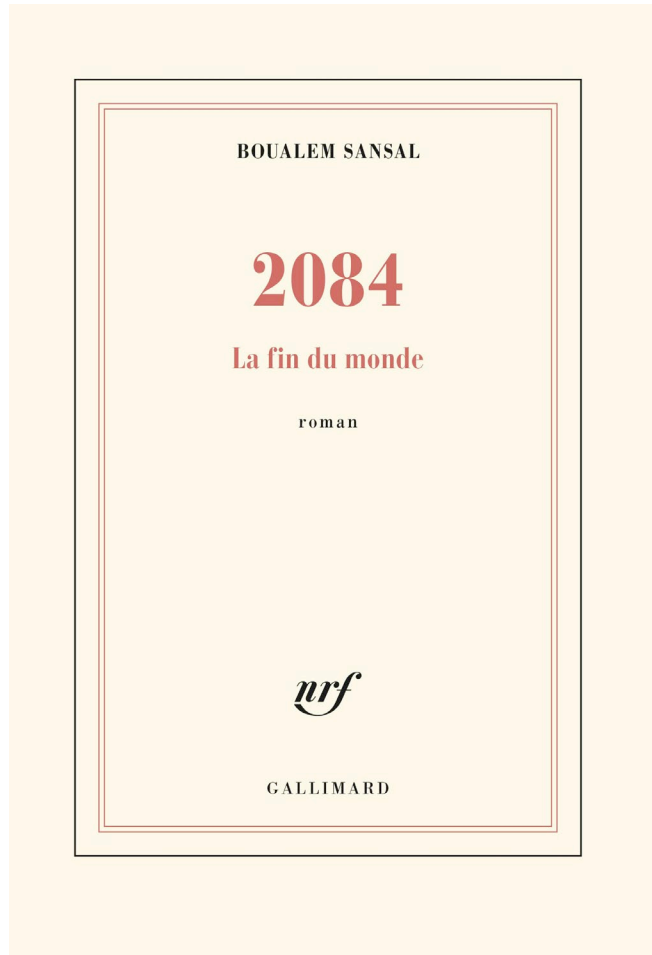


Boualem Sansal

Photo by Heike Huslage-Koch from Wikimedia Commons

[CC0](#)

# Boualem Sansal, 2084



Boualem Sansal, 2084 La fin du monde  
© Editions Gallimard, Paris 2015



ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)  
『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年



# 『2084』あらすじと主要登場人物(1/2)

- 設定: この世は唯一の神ヨラーが作った。アビはその代理人。地上にあるのはヨラーとアビを信奉するアビスタンという国のみ(全体主義国家、監視社会、自由がない)。時代は2084年から数十年経過していると思われる未来
- 主人公アティ、首都コッツアバッドの役人。結核にかかりサナトリウムで療養中、この世界に対する疑問を抱くようになる
- アティ、サナトリウムから首都に戻る道中、考古学者ナースに出会う。ナースはアビスタンの「正史」を覆しかねない遺跡を発見

# 『2084』あらすじと主要登場人物(2/2)

- 首都に戻ったアティは、自分の疑いが露見したらという不安を抱えつつ生活。職場の同僚**コア**と仲良くなる。コアもこの世界に疑念を抱いている
- アティとコア、当局から睨まれていると感じ、ナースを訪ねてアビスタンの中枢アビグーヴへ。ナースはすでに消された模様
- 身の危険を感じたアティとコア、**トーズ**のもとに匿われる。なおもナースの行方を求めて怪しまれて追われる。コアとはそのときに離れ離れに
- トーズは博物館を持っている。アティはそこで2084よりも古い時代があることを知る

# 『2084』と『1984』

| ブアレム・サンサル『2084』                                                          | ジョージ・オーウェル『1984』                                                                   |
|--------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| <u>アティ</u> 👤: 主人公。全体主義国家「アビスタン」に疑問を抱きはじめる                                | <u>ウィンストン</u> 👤: 主人公。全体主義国家「オセアニア」に疑問を抱き、ひそかに抵抗する生き方をはじめる                          |
| <u>コア</u> 👤: 主人公の同志。物語の途中で引き裂かれてしまう。 <b>男性</b> 。偉大なモクビ(≡イマーム)の孫だが、反抗心を抱く | <u>ジュリア</u> 👤?: 主人公の同志(スパイ? → 恋人: 隠れて愛しあう政治的行為)。物語の途中で引き裂かれてしまう。 <b>女性</b>         |
| <u>ナース</u> 👤: ナースはアビスタンの「正史」を覆す力を持つ遺跡を発掘し、レポートにまとめる                      | <u>ゴールドシュタイン</u> 👤: 反政府を率いる元指導者。著作『寡頭制集産主義の理論と実践』でビッグ・ブラザーの支配構造を暴く。それをウィンストンが読んで理解 |
| <u>トーズ</u> 👤: アティとコアに隠れ家を提供する謎の人物。アティはトーズは向こう側の人間なのではという疑念も抱く。博物館の保持者    | <u>チャリントン</u> 👤?: 古道具屋の主人でウィンストンとジュリアの密会の場所を提供。しかし実は思考警察の一員で2人を密告                  |

# 全体主義、監視社会

| ブアレム・サンサル『2084』             | ジョージ・オーウェル『1984』            |
|-----------------------------|-----------------------------|
| アティは執行部について知らない             | ウィンストンも党のことを知らない            |
| アビの肖像と監視の目<br>(ナディール＝電光掲示板) | ビッグ・ブラザーの肖像と監視の目<br>(スクリーン) |

- 「アビと執行部の温かい見守りの下、人生は曇りなく澄みきっており、秩序は完璧に保たれ、正義の同胞団の中枢は一致団結している」
- 「この連中は自分たちの地区で逸脱した行動を取る者を処罰し、街の治安と地域の正義を保証することが、自分たちの務めだと思っている」

ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年

著作権等の都合により省略しました

書籍の本文の見開き画像

森泉岳土(マンガ), 村上春樹(原作)

ジョージ・オーウェル(原作)

『村上春樹の「螢」・オーウェルの「一九八四年」』

河出書房新社, 2019年

# 全体主義、歴史の改竄

- 「歴史はアビの手で書き直され、確固たるものとなった。記録からは不要な箇所は削除された〔.....〕現在は永遠であり、今日はいつも今日なのだ」
- 「すべての記録が同じ作り話を記すことになれば――その嘘は歴史へと移行し、真実になってしまう」
- 不都合な事実をも利用:「システムは不都合な事実の発覚があろうとけっしてぐらつかない。それどころかその事実を回収することによってより強くなる」

ジョージ・オーウェル(著)、高橋和久(訳)『一九八四年』ハヤカワepi文庫、2009年

ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年

著作権等の都合により省略しました

書籍の本文の見開き画像

森泉岳土(マンガ), 村上春樹(原作)

ジョージ・オーウェル(原作)

『村上春樹の「螢」・オーウェルの「一九八四年」』

河出書房新社, 2019年



# イスラーム批判？イスラームのパロディ

- 「ヨラー」:「アラー」
- 「アビ」:「ムハンマド」
- 「アビスタン」:「信徒の国」の意味(アフガニスタンなどを連想)
- 「アビグーヴ」:アビの政治の中枢
- 「アビスタン人」:「ムスリム」
- 「ブルニ burni」:男性が着用する衣服
- 「ブルニカブ burniqab」:女性が着用する衣服(「ブルカ burqa」「ニカブ niqab」を連想)
- 「グカビュル Gkabal」:「アビの聖典」「クルアーン Coran」→「宗教」
- 「モクバ mockba」:「モスク mosqué」
- 「モクビ mockbi」:「イマーム imam」
- 「コッツアバッド Quodsbad」:聖都(アラビア語でal-Qodsはエルサレム)
- 「キイバ Kiiba」(130):「カーバ」
- 「マクーフ Makoufs」(12):Koufards(アラビア語で「不信仰者」)
- 「シャム」:断食の聖週間(ラマダーン)
- 「正義の同胞団」:「ムスリム同胞団」を連想
- 「アビラング Abilang」「アビ語」:アラビア語を連想。「ニュースピーク Newspeak, novlang」→[後述](#)

# イスラーム批判？イスラーム主義批判

- 書物冒頭の注意書：「読者諸君は、この物語が実話であるとか、世に知られた何らかの現実を基にしているなどと考えるはいけない」
  - 「アティの精神が拒絶しているのは宗教そのものよりも、宗教によって人間が押しつぶされることだった」
  - トーズの発見として、「グカビュルの起源」は「とある大昔の宗教〔その宗教は「かつては砂漠や平原に暮らす多くの部族に誇りと幸せをもたらすことができた」〕が内部に変調をきたしたことに由来するようだ」と叙述
- ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年
- Cf.サルマン・ラシュディ『悪魔の詩』

# アビ語とニュースピーク

- 「法律はもっぱらアビ語で話すことを民に強いる。アビ語というのは、国家内で信徒を団結させるためにヨラーがアビに教えた聖なる言語である」。「聖なる言語は、人に宗教を伝えることで、人間の思想や、嗜好、小さな習慣を変え、それどころかその肉体を丸ごと、眼差しや、呼吸の仕方まで変えてしまうのだ。その結果、人間の内にあった人間性は姿を消し、その廃墟から生まれた信徒が、新しいコミュニティに心身ともに溶け込むのだ」

ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年

- ニュースピークはオセアニアの公用語。「自由」「平等」「正義」「民主主義」などの語が姿を消す。ニュースピークの目的は、「イングソックの信奉者に特有の世界観や心的習慣を表現するための媒体を提供するばかりではなく、イングソック以外の思考様式を不可能にすることでもあった」

ジョージ・オーウェル(著)、高橋和久(訳)『一九八四年』ハヤカワepi文庫、2009年

# ゲッターとプロール

- 「荒れ果てた郊外」には「まだ小さな自由が残っている」。そこでは「すべてに逆らって、古文書からも消えてしまった古い邪教に執着し続けた古代の民の残党が暮らしている」
- ゲッターは自由の飛び地：「悲惨」「瓦礫の山」「不潔」だが「活力」と「反骨の文化」。「通りを女が歩いている」。壁の落書「ヨラーは絵空事」。「人間としてできる限りのことをもう一度始める」  
ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年
- 希望があるとすればプロール。聞こえてくる女性の歌声の心地よい調べ  
ジョージ・オーウェル(著)、高橋和久(訳)『一九八四年』ハヤカワepi文庫、2009年

# 反抗、抵抗：サンサルからカミュへ

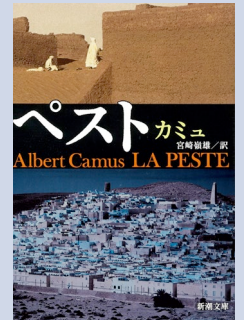
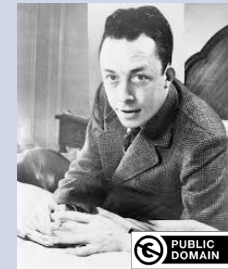
## ブアレム・サンサル『2084』

「アティは自分の置かれている状況を認識した。つまり、我々は自由でないが、自由であろうと死ぬまで奮闘する力を持っている。それを認識することの中に自由がある。本当の勝利は、はなから負けと決まっている戦を最後まで闘い貫くことにこそあるのだと痛感する」

アティは「人間というのは反抗を通してしか、反抗によってしか、存在することも、おのれを知ることもできないのだと思った」

## アルベール・カミュ

ペストに抵抗する保健隊。「かくかくしかじかの方法で戦うべきで、ひざまずいてはならぬ」。「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪い」（『ペスト』）



「個人を苦しめていた病気が集団的ペストとなる。われわれのものである日々の苦難のなかであって、反抗は思考の領域における「われ思う」と同一の役割を果す。[.....]われ反抗す、ゆえにわれら在り」（『反抗的人間』）

アルベール・カミュ、宮崎嶺雄（訳）  
『ペスト』新潮文庫、1969年

# 反抗、抵抗：サンサルからルソーへ

## ブアレム・サンサル 『2084』

「自分が奴隷だと自覚している奴隷は、たとえ主人が世界の王であろうとも、必ず主人よりも自由で偉大になるのである」

## ルソー

「人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鎖につながれている。自分が他人の主人である  
と思っているようなものも、  
実はその人々以上に奴隷  
なのだ」（『社会契約論』）

# 境界＝フロンティアを越える

- 「禁止されたルート！……境界！……いったいなんの境界だろう？ いったいどんな禁止ルートだろう？ この世界はひとつで完結しているのではなかったのか？」(物語の前半)
- 「僕は冒険してみたい。行き着くところまで行ってみたい。僕にはその道しかない……この世界での僕の人生は終わったと思う。できるなら僕は世界の向こう側でまた別のそれを始めたい」(物語の終局)

ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年

# 冒険とまどろみ

- 「安心して眠りたまえ、善良な人々よ」(ブアレム・サンサル(著)、中村 佳子(訳)『2084 世界の終わり』河出書房新社、2017年、警告より)
- 権力は「市民が享楽に耽ることだけを考えているとき、市民が享楽に耽るのを好む」(トクヴィル、松本礼二(訳)『アメリカのデモクラシー』岩波文庫、2015年)
- このようなまどろみを欲しないのなら「記憶の未来に関心を抱くこと」は「自由の未来を守る意志」(F・デュモン、伊達聖伸(訳)『記憶の未来:伝統の解体と再生』白水社、2016年)



# 投げかけたい問い

- 『2084』に描かれるディストピアは、現在私たちが生きている社会と隔たっているだろうか？
- 私たちの現状をくっきりと浮かびあがらせる「境界」はどこにあるだろうか？
- 「境界」を踏み越えることは必要か？なぜ閉じ込められた世界から脱出しようとする必要があるのだろうか？

# 加藤典洋『日本という身体』

「――あなた方はパン種を膨らまそうとしない。膨らむパン種になれば自分が「檻」のなかにいることを認めなくてはいけないからだ。しかしそれは自己欺瞞ではないのか。もし膨張の否定をいうならそれは「木杵」を除去した後、ちがう理由で、生きた理由に立っていわれるべきではないのか。そしていま、「木杵」があるなら、それを理由に、あなたは膨らまなければならない。なぜなら、檻のなかにとじこめられている人間の最低の誠実は、そこを「檻」として住みつづけること、たえずそこから外にでようと  
しつづけることだからだ」。

加藤典洋『日本という身体「大・新・高」の精神史』講談社選書メチエ、1994年、p.256

# 参考文献

- トクヴィル『アメリカのデモクラシー』、松本礼二訳、岩波文庫
- ホルクハイマー、マックス & テオドール・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』徳永恂訳、岩波書店、1990年
- マレー、ダグラス『西洋の自死——移民・アイデンティティ・イスラム』町田敦夫訳、東洋経済新報社、2018年（原2017年）
- 私市正年編『アルジェリアを知るための62章』明石書店、2009年
- 森泉岳土『村上春樹の「蛍」・オーウェルの『1984』河出書房新社、2019年
- Le Bras, Hervé, “ 50 nuances de vérités : Le nombre des musulmans en France”, 2016.
- Sansal, Boualem, *Gouverner au nom d'Allah : Islamisation et soif de pouvoir dans le monde arabe*, Paris, Gallimard, 2013.